

若菜下における紫の上について

— 女 楽 を め ぐ っ て —

朱雀院は、女三の宮と対面の上、その琴を聴きたいと、宮に伝え、宮の兄の帝もその陪聴を所望していた。源氏は、院の五十の賀に、宮が院の御前で琴を弾くように取り決め、日夜熱心に指導に当り、正月二十日過ぎの一日、その拍子合せのために、女楽を六条の院の寝殿で催した。その構成は

- 拍子 大納言左大将夕霧
- 笙 右大臣髭黒の三男、殿上童
- 笛 夕霧の長男、殿上童
- 琵琶 明石の君
- 箏 東宮の母女御（明石の姫）
- 琴 二品内親王（女三の宮）
- 和琴 紫の上

という豪華な顔触れで、楽器は六条の院に伝わる名器が用いられ、極めて格調の高い華麗な管絃の遊びとなった。名手揃いの女君達に伍して、女三の宮も、無難に琴を弾きこなした。その成果に機

久 保 重

嫌をよくした源氏は、琴について講じ、自分も和琴を執って合奏に加わり、催馬楽の「葛城」を奏でた。最後はうちとけた合奏になって女楽は成功裡に終った。

この日の女楽は、六条の院の隆盛を描いた絵巻物の一場面のような景観を展開した。早春の月と最盛りの梅花、居並んだ女君達の身分の尊貴さ、美貌、文化水準の高さ、名物を揃えた楽器、それらに加えて孫の君達の頼もしさ、嗣子夕霧左大将の立派さ等等に、院の主人公源氏は、現世の幸福を満喫したのであろう。しかし、この栄光に充ちた女楽は、源氏の正夫人の紫の上^(注2)にとっては、如何なるものであったか。

女楽の一日に、紫の上の経験したところを、彼女の心情に添って、逐条的に辿ってみよう。

(一) 宮廷風の雰囲気

彼女は、源氏に伴われて、自分の住む東の対から、女三の宮の住む寝殿に向いた。

かつて、新造の六条院で迎えた最初の正月、男踏歌の朝、その頃は寝殿に在った彼女の部屋で、源氏が、玉鬘・明石の君等を集めて、女楽を催したことがあった(初音・竹河)。末長い契りをこめて源氏と唱和した当時の正月を、彼女は感慨深く追懐したにちがいない。女三の宮の輿入れの後、宮に初対面の挨拶の際、勝気な紫の上は、東の対から参上する形を避けて、明石の女御の里邸退出の機を待って、女御の室から中の障子を開けて出向き、対面の場でも、優位を保って終始したものであった。昨年、今上が即位されて、宮を二品に昇叙されて以来、宮は格式が改まっている。

女君達は供の女房の容貌や衣裳にまで気を配って参集した。特に女の童はそれぞれ四人、揃衣裳を着せ、女主人達の趣味教養度を競うかの様に粧わせた。女御の女の童は、禁裡ならでは手に入らぬ唐綾や唐の綺を着け、紫の上の童は、特に容姿举措の優れた者を選び整えてあった。宮の方では、女の童だけを揃衣裳に着替えさせただけで、それも格別に珍らしいというものでないのに、宮廷風の気高く重々しい雰囲気で立ち勝り、皇妹二品内親王の格式の比類なきを思わせるのに十分であった。それは、紫の上の気品に圧倒されていた降嫁当時と全く別物の、間然する所のない、六条の院の正夫人の御前の空気であった。

(二) 座順
寝殿の南廂の隔ての襖を取り払って、褥を敷き並らべ、几帳だけ

を隔てとして女君達の座が設けられていた。上席から女三の宮、明石の女御・紫の上・明石の君の順序であった。それぞれの前に順序に従って楽器が置かれる。この座順は皇室の人と、その他とに区別したもので、非常に特殊的である。宮中の御遊に召されたのでなく、私的催しなのだから、源氏の意向次第で、琵琶・箏・琴・和琴という管絃の遊びの本来の順位に準じて、座を定めることが出来た筈である。紫の上と宮とは従姉妹として睦び交わして来た仲であった(若菜上)。それなのに、晴れの場で、一度ことう席次が定められると、今後二人の正室の地位関係は、女三の宮が上位と決定づけられてしまう。その苦痛を紫の上忍べと云うのだろうか。「いみじきことありとも、御ためあるより変ることはさらにあるまじきを、心なおきたまひそよ。」と、宮の輿入れに当って紫の上に誓った(若菜上)言葉を、源氏は忘れてしまったのだろうか。年長でもあり、もとのから正夫人でもある紫の上は、屈辱感に耐えていなければならなかった。隣席に明石の君が着裳姿で居るのが、彼女に「しお、宮との身分差を痛感させたことであろう。六条の院の寝殿も自分も変ったとしみじみ淋しく思ったであろう。」

(三) 調絃

演奏に先立って、女三の宮のためには、師の源氏が琴をみづから調絃して、御簾の中に差し入れた。女御の箏は、夕霧を呼び寄せて調絃させた。紫の上の和琴と明石の君の琵琶とは、奏者が自身で調絃した。この二人が貶められたのでなく、若く心もとないう上位二人に特に源氏の配慮が加えられたのであろう。しかし、異例のいたわ

り方である。因みに、琴は七絃、長さ三尺六寸、広さ六寸、琴柱がない。女の手でも、調絃はそんなにむづかしいわざではない。和琴の大きさは、長さ六尺二・三寸か六尺、小さいもので五尺八寸か五尺。六絃。琴柱を立てる点は箏と変らない。箏は、長さ五尺、十三絃。琴柱を立てる。^(注5)

「箏の御琴は、ゆるぶとなけれど、なほかくものに合はするを調りの調へにつけて、琴柱の立処乱るるものなり。よくその心し^(注5)らひととのふべきを、女はえ張りしづめじ。」^(注5)と云う源氏の声は、紫の上にも聞えたとに相違ない。合奏中に琴柱の位置がずれる危険度は箏よりも、寧ろ、調子の乱れ易い和琴の方が高い。彼女はあてがわれた名器を入念に調絃しながら、丁重に取り扱われている女三の宮に比べて、源氏の関心の外に置かれている我が身が悲しかったであろう。

四 琴の論

合奏の出来栄えに上機嫌の源氏は、夕霧にむかつて、音楽を論じ、今宵の女君達の伎倆は、主上の管絃の御遊に召される当代一流の名手達にも劣らないと賞讃し、六条の院の音楽水準の高さを自慢する。夕霧は、「特に和琴は、当代の名手を抜く前太政大臣(もとの頭中将)に匹敵する」と云う。興に乗った源氏は、琴について滔々と論じ出した。その沿革と徳とについて、我国に伝来した経緯と達人について、博い知識を披瀝し、琴がいかに学習困難か、しかも、いかに重要な、最高の基準的楽器かを長々と講説し、「自分は熱心にこれを学んで、遂に師とすべき者がない域にまで達したが、それ

でも古の達人には劣る。まして後世には、伝授できそうな子孫がない」と云った。そして、「明石の女御所生の皇子達の中に、自分の期待通り音楽の才能に恵まれた人が出たら、修得したわざを悉く伝授しよう。二の宮には、今からその気配が感じられる」と云ったので、明石の君は光栄に感激して涙を浮かべた。

この催しの主目的が琴の拍子合せであるから、源氏が女三の宮のために気配りをしたり、琴の価値について詳しい説明を加えたりしたのは当然と云える。源氏にすれば、ここで宮の演奏に一層花を添えて、彼女に誇りと自信とを植え付けて、西山での御前演奏での成功を確実なものにしたい、という気持も働いていたかも知れない。それはそれでよいが、一座の中心として、主催者として、彼は、夕霧が和琴の伎倆を賞揚した機会に、紫の上の功をねぎらうべきであった。管絃合奏で和琴の役割は重い。しかもむづかしい。

「和琴こそ、いくばくならぬ調べなれど、あと定まりたることなくて、なかなか女のたどりぬべけれ」

と彼の案じていた大役を、夕霧が驚嘆する程見事に果たしたのだ。源氏は、満足しているながら、何に憚ったのか、和琴の出来栄えには触れずに、琵琶の出来栄えを自分の功に帰して讃め、次いで、琴の価値について蘊蓄を傾けて力説したのだった。

この物語の中で、琴を弾くのは源氏以外には、營兵部卿の宮(若菜上)・八の宮(橋姫・椎が本)、女では、末摘花(末摘花)・明石の君(松風)・女三の宮(若菜下)・小野の妹尼君(手習)だけである。琴は源氏の特に愛好した楽器であるが、彼は、女三の宮以

外の女性には習わしていない。明石の君は、源氏を憫んでその形見の琴を弾く場面が一度見えるだけである。女三の宮も、もともと朱雀院の許で学んだのを、院の所望で弾かねばならなくなり、源氏が指導するはめになったのであった。源氏が、その最も愛好し且つ特技とする楽器でありながら、明石の女御にも最愛の紫の上にも伝えなかったのは、理由があったことと思われる。紫の上の音楽的資質は彼が知悉している処である。伝授する相手を一門の中にもとめたら先ず彼女を思い着く筈であるのに、敢えて彼女に琴を教えなかつたのは、彼の音楽上の識見・好尚と、そして何よりも、紫の上を抱いている愛情に基づくものであつたのではなかつたか。多分、美的見地から彼は、自分の愛する女性に琴を学ばし得なかつたのである。末摘花と妹尼君とが、二人とも、世間離れのした、しかも美しいとは云えない存在であるのでも、それは察しがつくであろう。しかし、宮の演奏に力を注いでいる源氏を見、その講説を聴いた一座の人々は、その様な源氏の深慮を想像もしなかつたであろう。源氏の膝下に居ながら伝授に与かれなかつた不肖を恥じた夕霧と同じ様に、紫の上は我が身を恥じ、女三の宮を羨ましく思つたであろう。明石の一族には、二の宮に、将来が約束されたが、紫の上だけは、ひとり剝落感を噛みしめるしか、すべもなかつたであろう。

【四】しづく白玉

拍子合せの器楽合奏は、華やかに成功裡に終つた。女御が筆を紫の上に譲り、源氏に和琴がまわつた。「葛城」の合奏になり、源氏は美声で、繰り返し歌う。

へかづらきの 寺の前なるや とよらの寺の 西なるや えのは井に しらたましづくや ま白玉しづくや おおしとど おしとど しかしては 国ぞ栄えむや わいへらぞ 富せむや おおしとど としとんど おおしとんど としとんど

正月でもあるし、朱雀院の御賀のための拍子合せでもあるので、めたい曲を選んだのであるが、源氏の今夜の気持にぴつたりの歌詞である。興に乗って源氏は歌う、「国ぞ栄えむや、我家らぞ富せむや」と。東宮の母女御を出し、親王・内親王を育て、皇妹を妻とし、比類なき美女才媛を擁し、長男は大納言左大将、養女王璽の夫は帝の御伯父右大臣。男孫達も、童殿上が許されるまでに成育し、一門は末広がり隆運に向つている——彼が、現在、眼前に見る光景こそ、この歌詞通りなのである。歌詞の中の「しづく白玉」に特に深い喜びを荷なわせてこの曲を源氏を選んだとも考えられる。管絃の遊びに催馬楽を加えるのは常のこと、その際律旋の曲は省くことがあるが、呂は欠かせない。呂旋の曲の中から、家門繁栄を謳う「葛城」が選ばれたのであろう。歌いながら、源氏が「白玉」に、もしも特定の人を連想したとすれば、それは一人娘の女御であつたであろうと思われる。^(注6)しかし、紫の上には、源氏が女三の宮を、真白玉に擬してこの曲を選び、彼女を崇め愛しむ心を歌い上げていると、聴き止められたのではなからうか。事実、宮は白玉のようにならぬ素直で可憐である。彼女は、源氏が宮に抱いている愛情を見たような気がして辛かつたであろう。その「白玉」を家門の富栄の象徴として囁す源氏の美声を耳にしていると、自分が源氏の生

活圈から除外されている様に感じられて、彼女は、この曲の華やかさが悲しかったであろう。

(六) 女三の宮の琴の音色

合奏中の宮の琴の音色を聴いて、夕霧は「優になりける御琴の音かな」と思った。譜はおぼえられても、音色を美しくするのは容易ではない。助演の女君達の奏でる名器の妙音に伍して、宮は琴を危なげなく弾いた。うちとけた合奏に移り、凡ての楽器が調子を律に変えて掻き合わせを弾く中であつても

琴は五個の調べ、あまたの手の中に、心とどめてかならず弾きたまふべき五六のはらを、いとよもしく澄まして弾きたまふ。さらにかたはならず、いとよもしく澄まして聞こゆ。春秋よろづのものに通へる調べにて、通はしわたしつゝ弾きたまふ。

宮は、実に巧妙に弾いた。壺を押えた要所要所の奏法の正確さ、音色の美しさ、四季の変化によって変る調べの会得、と少しの欠点もない。短時日の間に、よくここまで周到入念に習得したものだ。と、紫の上は宮の上達に感心し、また、学んだ宮よりも、教え込んだ源氏の手腕に驚嘆せざるを得なかつたであろう。聡明で、音楽に造詣の深い彼女は、源氏が宮の指導に働かせた達人の知恵を、そのままに感得理解することが出来たであろう。源氏が「琴の学習はむつかしく、独り出で離れて、心を立てて、唐土高麗と、この世にまどひ歩き、やっと修めることが出来るのだ」と説き、「伝授する子孫が居ない」と嘆いていた琴の奏法を、宮は、彼の掛かり切りの指導によって、短期間にこれ程見事に手に入れることが出来たのだ。

三十年近く共に暮らして来た自分にも、唯一人のいつき娘の女御にも、教えなかつた大切なわざを、源氏が全力を尽くして宮に伝授した成果を眼のあたりにして、紫の上は、深い衝撃を受けずには居られなかつたに違いない。彼女は、源氏の異常と思われるまでの努力を、宮に注ぐ愛情から発していると解したのであろう。宮の琴の音色から、彼女は、源氏から愛され源氏に尽くして来た、永年の自分の日常生活などとは全く異次元の、源氏から愛情の奉仕を受ける格式高い姫宮の生活世界が、六条の院内に実在しているのを——源氏から愛され崇められている、若く気高き「六条の院の北の方二品内親王」そのものを感じ取っていたであろう。彼女は、琴の演奏の出来栄に、宮への愛情を深めているらしい源氏の気配を、敏感に受け止めながら、夫婦の心の距離が遠ざかつて行くさびしさを味わっていたと思われる。

紫の上は女楽の終了した後も、後に残つて宮の話相手をつとめるなど、この催しに終始誠実に協力する。和琴と箏との見事な演奏をも含めて、女楽を盛り立てるために全力を注いだ。女楽は成功した。しかし、彼女は傷心を抱いて東の対の自室に帰つて来た。

女楽の一日、彼女は、自分とは全く格式を異にする正夫人二品内親王を見ることになった。そしてその格式の高さが、そのまま、六条の院の隆昌を意味し、六条の院の隆昌は、東宮の後楯、立后を尊されている女御の後楯となっている——それは、以前から知っていたことであるが、改めて実感として再認識させられ、その上、源氏

の愛までが女三の宮に移っているのを見たと思つた。こういう状況の中に在って、六条の院における自分の存在は一体何なのだろうか、紫の上は思はず居られなかつたであらう。永年、源氏の嫡妻として、院の内外に重い信望を保つて来た彼女にとって、今日の経験は、心の深处にまで徹えるものであつたと思われる。

女楽の一日で、紫の上は、疎外感・喪失感・源氏に対する不信感などを、重層的にさまざまに心に植へつけて、自室に戻つて来た。彼女の心は重かつた。御代変りの当初から「わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ。さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな」とかねて心づもりをしていたことであつた。新帝の心寄せがあるので、女三の宮の勢威が加つて行つても、源氏と紫の上の睦じさはいや増していた頃、紫の上は、この状態のまま出家しようとして決意していた。源氏の愛が薄れる日の、わが心のみじめさを怖れたのである。源氏は、無論、彼女の出家を許す筈はなかつた。その中、源氏の訪れが、次第に女三の宮への訪れと等しきようになり、遂に今日の憂き目を見ることになつた。みじめさが人目に立たない中に、わが心の傷が深くならない中に、出家しよう。それが、今の自分に残された唯一の道だと彼女は思つた。

実は、源氏と女三の宮との間柄は、紫の上が怖れているようなものではない。彼等の対座している場面は次のように描かれている。

「そのかみよりも、またこのころの若き人々の、ざれよしみき

過ぐすに、はた、浅くなりたるべし。琴はた、まして、さらにまねぶ人なくなりたりとか。この御琴の音ばかりだに伝へたる人、をさをさあらじ」とのたまへば、何心なくうち笑みて、うれしく、かくゆるしたまふほどになりける、とおぼす。二十一、二ばかりになりたまへど、なほいとみじく片なりに、きびはなるこちして、細くあえかに、うつくしくのみ見えたまふ。「院にも見えたてまつりたまはで年経ぬるを、ねびまさりたまひにけり」と御覽すばかり、用意加へて見えたてまつりたまへ」と、ことに触れて教へきこえたまふ。げにかかる御後見なくては、ましていはけなくおはします御ありさま、隠れなからましと、人々も見たてまつる。(傍点、筆者)

源氏の、当代の人が琴を学ばなくなつたのを残念がる言葉を、宮は、自分が賞められたのだと誤認して、にっこりする。その上達も全く源氏の指導のお蔭だとさえ、わかっているのか、どうか。源氏は、彼女を、七年前の興入れ当時と同様子供扱いにし、宮の女房達は、源氏の宮に対する親子関係のような後見を感謝しているという状態である。宮は美しい。しかし、その美しさは、

人よりけに小さくうつくしげにて、ただ御衣のみあるこちす。にほひやかなる方は後れて、ただいとあてやかにをかし、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむこちして、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見えたまふ。

少女の未成熟の美である。源氏が灯影に見た、女楽の夜の女君達

の容姿は、それぞれ、みな花に喩えられているのに、女三の宮だけは、芽ぶき初める頃の青柳に擬えられている。宮より二・三才年下の女御が、「同じやうなる御なまめき姿の、今すこしにほひ加はり、もてなしけはひ心にくく、よしあるさま」であるのに、宮は、どこまでも可憐に尽きる。「いと御衣がちに、身もなく、あえかなり」と見えた七年前とあまり変らない。身分が高くて、「よその思ひ」は准上皇の正室として相応しいが、能力が伴わず、宮の降嫁に氣をつかう紫の上に、源氏が、言葉少なに「心安く思しなしたまへ（あなたは安心してよい）」と云った当時の状態から、宮は殆んど進歩していない。帝に氣を遣って、源氏が、最近では、宮を紫の上と同等に扱って「渡りたまふこと、やうやう等しきやうに」していても、琴の伝授に熱中していても、源氏が宮に夫婦愛を感じるまでに、宮は心身ともに成長していないのである。

一方、紫の上も七年前と変らない。源氏の目に映った紫の上は、桜に喩えられている。

葡萄染にもあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に、御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに、大ききなどよきほどに様体あらまほしく、あたりにほひ満ちたるこちして、花といはば桜にたとへても、なほものよりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

まさに、女盛りの佳人の成熟美である。若い宮や女御の君よりも豊かな御髪、背丈、姿つきの程よさと、四人の中でこの人の姿態だけが、視覚的にだけでなく、感性的に鑑賞されているのに注目した

い。華麗で淨らかで、しかも官能に迫る様に、匂い満ちるその美しさは、爛漫の桜花に似て、それよりも美しいと源氏は見たのであった。十年前の野分の日、垣間見た夕霧も、彼女を樺桜になぞらえた。

け高くきよらに、さとはほふこちして、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見るこちす。(野分)

現在の紫の上は、当時よりももう一段、美しく成熟しているのである。

源氏の彼女に抱いている愛情と信頼は、変っていない。彼女が、女楽に示した音楽の力量といい、女御腹の皇子、皇女を養育する能力と云い、万事に互って備っている器量に、源氏はこれ程の人は又とあるまいと感心する一方、余りにも完璧な人は長命を保ち難いのではないかと憂慮している。紫の上は今年三十七才、藤壺の崩御したと同じ年齢である。源氏は彼女に祈禱を勧め、大きな仏事をする様なら、自分に宮ませてほしいと云う。また、女三の宮の降嫁があったのを契機に一層あなたへの愛が深くなったという。ただかく何となく過ぎ行く年月だが、こうして朝夕一緒に暮す喜びだけが、何にも代え難い貴重なものに感じられると云う。みな、彼の偽らない本心から発した言葉である。

明石の女御が紫の上に抱いている尊敬と慕慕の感情も変っていない。夫の春宮が天位に即き、第一皇子が立坊し、帝寵が厚く立后も予測される身となった今も、ただ一途に紫の上を親として尊敬している。女楽の場で筆を紫の上に譲ったのも、「次には、お母様のを

お聴かせ下さいませ」という、敬意と甘えのまじったいたわりの表現であったのだらうと思われる。女御のやさしい気持は、彼女に常に通じてい、彼女もまた女御を心から大切に思っている。長い間、明石の君を許す気になれないでいたのに、女御のための誠心から明石の君に、今は心を開いている。

女三の宮も、紫の上に競争心を持ったり、嫉妬したりしている様子はない。宮は、置かれた境遇に素直に随っているだけである。二品に昇叙せられた後も、彼女自体には、変化も進歩も生じてはいない。

明石の君は、孫が東宮になり、娘が女御殿と呼ばれる地位に昇っても、自身は「隠れがの御後見」に安じて、源氏の評を借れば「うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬ気色下に籠りて、そこはかとなく恥づかしき所こそあれ」という状態を保つて、紫の上に少しも以前と変ったそぶりは見せない。

以上のように見ると、六条の院の主要人物にも、その相互の人間関係にも、何の変化も起っていない様に思われる。しかし、紫の上が強い衝撃を感じた変化——六条の院の中心部を王室風に塗り変えてしまう程の変化が起きているのも事実である。

○ 女楽の翌日、源氏は紫の上に対してしみじみと述懐した。

「みづからは、幼くより、人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出でて、今の世のおぼえありさま、来し方にたぐひ少なく

なむありける。されど、また、世にすぐれて悲しきめを見る方も、人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人にさまざま後れ、残りともれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、それにかへてや、思ひしほどよりは、今までも、ながらふるならむとなむ、思ひ知らるる。君の御身には、かの一節の別れより、あなたこなた、もの思ひとて、心乱りたまふばかりのことあらじとなむ思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、やむごとなき人といへど、皆かならずやすからぬもの思ひ添ふわざなり。高きまじらひにつけても、心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓のうちながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし。そのかた、人にすぐれたりける宿世とはおぼし知るや。思ひのほかに、この宮のかくわたりものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる心ざしのほどを、御みづからの上なれば、おぼし知らずやあらむ。ものの心も深く知りたまふめれば、さりともとなむ思ふ」

源氏の言葉は二つの部分から成っている。前半では、わが一生を顧みて、終始憂愁のつきまとう身だと嘆き、後半では、紫の上に対して、あなたは自分とは違って、幸運の下に過して来ていると云うのである。前半は彼の主観的心境としては、さもあつたであろうと察せられるが、後半は、われわれ読者の側から見ても、客観性が乏しい。まして、源氏の女性関係で、常に悩んで来た紫の上は、呆れ

る外はなかったであろう。しかし、源氏は、しみじみと、愛をこめて語っているのである。彼の心境に立ち入って、その悲しみを考えて見た上で、紫の上を幸運だという彼の気持を探って見よう。

隣国の勢力の強大になるのを恐れて、国中から妙齡の美女を選び、美衣を纏わせ、女樂を編成して送ったという中国の故事がある。(注7)それは国王の心を熔ろかすに足る欲樂であつたと伝えられている。六条の院では、院内の女君がうち揃つただけで、第一流の名手、最高の美女による器樂合奏が忽ち編成された。合奏は妙音に次ぐ妙音の連続、まさに、六条の院の繁榮の達成を示す最大の欲樂であつた。昨夜の女樂の陶醉感がまだ残っている源氏は、宮の琴の出来栄えに、肩の荷を下した安堵感も加つてか、妙に悲しいことばかりが思い浮かべられる。紫の上が、その余りな完璧性のために、早逝しないかと不安になり、共に暮して来た年月のことなどをしみじみと回想している中に、この述懐になつたのであつた。母と祖母に次々と死別し、父帝の崩御に遭い、須磨・明石に流離の生活を送つたこと、藤壺女院に先立たれたこと、冷泉帝に継嗣が生れなかつたこと——彼が遭遇した悲運として、そこまでは、我々にもわかるが、「残りともまれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること」とは何なのであろうか。「多く」と云うから、彼の憂愁の種になるものは、一つでない。また、それは、「今の世のおほえありさま来しかたにたぐひ少なく」ある現在において、彼が体験しているものようである。更にまた、彼は自分の不幸と対比して、紫の上

の「親の窓の内ながら過ぐたまへるやうなる」心やすさを、誰にも勝る幸福だと云っている。以上の点を合わせて考えると、彼が現在「あぢきなくさるまじき」事に悩んでいるのは、宮廷関係の気苦勞なのではなからうかと推測される。

この物語では、六条の院の主源氏が、「院」又は「六条の院」と記されているのは、特に、准太上天皇という身分を表現する必要がある場合に限られていて、普通は、「大殿」又は「大殿の君」と呼ばれている。これは、彼が准太上天皇の称号を賜つた後も、私生活を大切にし、私生活の場である六条の院に權威の秩序を持ち込むことを嫌つた、彼の人柄を表現しているであろう。それはまた、作者の理想でもあつた様である。彼はそういう私的で温い雰囲気に含まれた生活の伴侶に適合するように紫の上を育成し、六条の院をその望みに合つように造宮し、その中で、美を樂しみ美を創り出す生活を存分に享受していたのであつた。冷泉帝時代はそれが可能であつた。

冷泉朝では彼と天子とは、これは、当人達の間だけの秘密であるが、父子という強靱な絆で密接に結び着いていた。彼と朱雀院との関係は、二人とも政治の表面には出ないが、源氏が優位に立つて、院を兄君として敬愛する間柄であつた。その皇子東宮は、母女御と梨壺に住んだ幼少時代から、源氏の厚志を受け、やがて明石の姫を女御に納れた間柄で、やはり愛情による結合関係と云える。しかし、冷泉帝が讓位し、新帝の御代に変わると、源氏は、絶対主権者としての帝の權威を、尊重しなければならぬ立場に立つことになつ

た。天子の交替期の朝廷が、いかに、冷厳過敏な秩序の世界であるかは、われわれ読者も経験的に知っている。昔、若く世間知らずであつた彼は、桐壺帝から朱雀帝に御代が変わつた際、政変の渦に巻き込まれて苦汁を嘗めた経験がある。ちよつとした無頓着や不用意が原因で、謀叛の嫌疑がかかるのを見て来た(賢木)。この度は政変は起らなかったが、御代変りに連動して、源氏の周辺にも変化が生じている。朱雀院は、帝の御父として崇めねばならなくなった。女三の宮も姪であつたのが皇妹となり、二品に叙せられてからは、當代関係の最高位女性になった。東宮の女御であつた明石の姫は、新東宮の御母女御殿となり、それぞれに、地位に相当する礼遇が要ることになった。女楽の場面で見た、宮廷化された雰囲気も、四人の女君の座順も、女三の宮に対する源氏の丁重な待遇も、悉く、こうした背後関係から生じたものであつた。新帝の後宮には、明石の女御より一足先に入った、左大臣の女麗景殿の女御が在る。宿曜の予言によつてわが女の立后を期待し、住吉明神の加護を信じて東宮の即位を祈っている源氏は、女御に競争者のあることを視野に入れて、女御と東宮の後見としての立場からも、帝の意向を常に大切にしていなければならぬのである。朱雀院が、かねてから「思ふやうならむ御代には、さまざまにつけて、御心とどめて思したつねよ」と、鍾愛の女三の宮への配慮を依頼していたその東宮が、即位した。院は、夫の源氏は宮の表向きの後見、実質的なこまやかな後見は兄帝にと、心に定めて、春秋の朝覲の行幸にも、宮の保護を奏した。帝は、宮を二品に叙し封戸を増し、源氏にも度度宮をよろしく

頼む旨の仰せ言がある。その結果が、愛情とは無関係に、紫の上と「等しきやうに」宮の許を訪れる、待遇の変化となつて現れたのであつた。「宮の琴の上達の程度で、源氏の宮に寄せざる志を測ることが出来る」と、朱雀院が陰口を云い、その噂を耳にした帝が、「自分も陪聴したい」と云つたと洩れ聞いた源氏が、急に、宮の琴の指導に乗り出した裏には、こういう面倒な、止むを得ない事情があつたのである。源氏の帝に対する気苦勞は、これだけで済むものではない。女三の宮の所遇などは全豹の一斑に過ぎないのではなからうか。帝の唯一人の肉親の右大臣が、帝の即位以後、頗繁に六条の院を訪れているところから察すると、表面には立たないが、隠然たる政治上の大勢力を保っている源氏の様子が覗われるが、政権を取り巻く貴族間の抗争と全然無関係の座に安住していた冷泉朝とは事変り、気骨の折れる話を持ち込まれる事もあろうし、「味気なくさるまじき」事を見聞きする事もあろう。

冷泉朝時代の六条の院のような美と愛とを基調とする小宇宙をA世界、国王の権威と秩序とを基調とする競争社会をB世界と仮りに名づけると、源氏はA世界に生きることを好み志しながら、課せられた宿命を果たすためにはB世界に留まつて、不自然不合理にも耐えていなければならないのである。男性と女性との違いはあるが、彼の母はB世界の中でそねみを受けて早逝し(桐壺)、藤壺の女院もB世界に在つて、桐壺の帝の死後、苛酷な運命に泣いた(賢木)。秋好む中宮にも明石の女御にも、自分の死後に一抹の不安が残る。紫の上だけは、須磨退去の一時期以外は、少女時代から現在に至る

まで、常にわが手許でA世界の生活を送ることが出来た。その点では、女御よりも、源氏自身よりも、誰よりも優れた宿運を紫の上は受けていると源氏は思う。B世界を全く知らない彼女との生活だけが、今の彼を救っている。その喜びがある限りは、彼は、心に染まぬ世界の諸諸の負担にも強制にも耐えて、生きられる。女三の宮の興入れ以来、宮との比較で、彼は、紫の上の総てに互る卓越性を貴く感じて、愛を深めて来たが、御代変り以後は、更に、いかに彼女が、失ってはならない大切な宝であるかを知ったのであった。

源氏の述懐を、もしも明石の君が漏れ聞いたなら、彼の言葉は、偽りのない、真情から出た告白として受け止められたであろう。彼女は、女御の後見として宮中に出入したことがあったから、その間に、些かの非礼も許されないB世界の緊張した空気を、体験していたであろう。また、源氏の紫の上と女三の宮とに対して抱いている愛情の、質的な差異をも、日頃から察知していた。従って、昨日女楽で源氏が見せた女三の宮への気配りを以って、彼が、宮に心を移してしまつたなどとは思ひも寄らない。彼女は、宮の降嫁を契機として紫の上を一層愛するようになった、という彼の言葉を、さもあろうと聞き、源氏に頼りにされている紫の上を羨しく思ったに違いない。しかし、A世界だけしか知らない紫の上は、昨日の源氏の宮に対する親切さを、愛情の表れと解した。従つて彼女には源氏の述懐は、空疎なものとしてしか響かなかつた。彼女は言葉少なに答える。

「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおほえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける。」

紫の上には、ものはかなき身が悲しい。皇妹二品内親王に比べて、自分は、親王女とはいへ、孤児同然の状態で源氏に引き取られ、結婚も惟光のはからいで、当人達だけで内内で挙げたのだった。だから、源氏が「親の窓のうちながら」と云つた言葉は彼女の心に突き刺さつた。源氏の愛だけを頼みにして来たのであつたが、昨日の女楽で、彼の心が宮に移つてしまつたのを確認した今は、何一つ頼るものもない身の上になり果てた。六条の院の正夫人という地位があつても、源氏に顧みられなくなつた今は、よそ目だけのしあわせに過ぎない。それでさえ、孤児同様であつた身分には、過ぎた地位なのだ。不幸を代償として寿命が与えられるというのが本当なら、私が生きているのは、夫に見捨てられたという悲しみのお蔭なのだと思わなければならないのだつたと彼女は云う。源氏の愛が、言葉通りには信じられなくなったのである。しかも、源氏を忘れ去ることは出来ない。それ故悲しいのである。

新帝が即位した時、紫の上は、女三の宮の勢威が増して、正夫人としての自分の地位が、曖昧なものになる日が来るのを予見していた。そういう惨めさを避けるために、出家の許しを源氏に請うたのであつたが、源氏は勿論許さなかつた。後世を願うための出家とあれば、「女御の養母という立場も保全されるし、世間の承認も得られ、源氏に対する絶ち難い愛情も、戒律によって遮断することが出

来よう、住まいには二条院がいい、と彼女は計算を立てていたのであろう。反対されても彼女の決意は変らなかつたが、賢しがつているように取られるのを憚って、そのまま日を送っている内に、昨日の様な惨めさを経験することになってしまった。今、出家しなればこの上の恥辱を見ることになるだろう。今ならばまだ間に合うと、彼女は思ったであらう。「命が長くないような気がしますから、出家を許してほしい」と、上の答えに続けて、源氏に切願する。自分ひとりの問題として、自分が身を退くことで一切を解決しようとしているのである。そこに、彼女の悲しみの深さと、決意の堅さとは覗かれるのであるが、源氏は、彼女の気持の中に分け入って聞き質すこともせず、強い言葉で拒否した後、次のように云った。

さてかけ離れたまひなむ世に残りては、何のかひかあらむ。ただかく何となく過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ。なほ思ふさま異なる心のほどを見果てたまへ

源氏は偽りのない気持を吐露して翻意を求めたのであるが、紫の上は「例によって、同じ事ばかり……」と思う。二人の正夫人を持つだけでも異常なのに、昨日のような思いを味わわせておいて、「思ふ様異なる（女三の宮よりもあなたを多く愛している）心を見届けしてほしい」と云われても、彼女には素直に受け容れることは出来ない。心の中で「今は、ただ、身を退こうという願いをきき入れて欲しい、急を要するのだ」と思つて、涙ぐむ。源氏は紫の上を慰めるつもりで、葵の上、六条の御息所、明石の君を次々と批評して、最

後に、紫の上が明石の君を許しているのを賞めて

「人により、ことに従ひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ。さらに、こころ見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。いとけしきこそものしたまへ」

と云う。彼女が明石の君に本当に心を開いているのではなくて、女御を愛する余りに、その生母に源氏が愛を分け、同じ院内に住ませているのを見ゆるしているのである。紫の上の嫉妬癖がおさまつたのではないと、そこまでは源氏にもわかつているのだ。しかし、彼が、紫の上が心を二筋に使っていると見たのは誤解である。彼女はそんな器用なことが出来もしないし、またそういうことを好みもしない。ただ、女御に向けている愛の深さが、一切を蔽っているだけなのである。源氏は、女三の宮に紫の上が嫉妬している、そこから彼女の出家志望も生じていることは気づいているようである。だからこそ、先に「思ひの外に、この宮のかく渡りものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる心ざしのほどを……」といったのを、また繰返して「なほ思ふさま異なる心のほどを見はてたまへ」と云う。彼は、多分、紫の上の美質を信じ、自分の彼女に抱いている愛を信じる余りに、彼女の苦悩に思い至らないのであろう。勿論、彼は気休めを云っているのではない。しかし、紫の上は最早や容易に信じない。彼女は疑っているのではない、見たのである。源氏は、紫の上が女楽の一日で、どれ程深く傷ついたかを知らない。彼は紫の上は、「人により事に随つて二筋に」心を使い分ける能力を備えていて、半面では嫉妬心

を抱きながらも、女三の宮を尊重し愛しているのだと錯覚している。降嫁の際、彼女が源氏に云った言葉は彼は覺えているのだから。「ここにはいかなる心をおきたてまつるべきにか」と彼女は云ったのだ。しかし、彼女の本心は二人の正夫人が出現することに反対だった。まして自分が宮の下風に立つことは絶対に承引出来なかつたのだ。^(注九)彼女は自分の立場を、純粹に、明確に保つために、能力の限りを尽した。^(注九)そして一応の成功を見た。しかし、新帝に御代が變つて、院の内外における宮の勢力が加わるのを予知した彼女は、最早や自分の退く時が来たと悟つた。源氏の愛が褪せない中に出家して、六条の院から身を退くのが、彼女のせめてもの望みであつたのである。その望みも崩れた今は、恥辱から免れるのが僅かに残されている慰めである。声望が高かつただけに、源氏に見捨てられた惨めさは深い。それを院の内外に知られない中に、出家を遂げなければならぬ。それなのに源氏は許可してくれないで、実を伴わない言葉だけで慰めにかかる。その褒め言葉さえ自分を正当に理解しているものではないのが、彼女には悲しかった。源氏は、宮にいとよく弾きとりたまへりしことよるこび聞えむ」と云い残して、女三の宮の許に去って行つた。紫の上はその曉方に発病した。

女樂の翌日の源氏と紫の上の会話は、互いに、思う所を相手に理解されずに、空転したままで終つた。

もしも、紫の上が源氏の述懐を、われわれが諒解した程度にで

も、理解することが出来て、源氏の愛を、彼の言葉通りに信じ得たら、彼女は救われるであらうか。一方、源氏も、紫の上の美質と卓越性とだけを見ずに、彼女の心奥の苦惱に気付き、彼女が出家して正夫人の座を退くことによつて一切の矛盾を解決しようとする真意を知り、B世界からの影響が彼女に被害を及ぼしていることを、覺ることが出来たら、紫の上は幸福を取り戻すことが出来たであらうか。そうは行くまい。慥かに二人は互に愛し合い、求め合つていたことを確認するであらう。しかし、源氏がB世界に繋つている限り、彼等二人にもとの平安は望むべきでもないであらう。B世界から持ち込んで来る煩わしさから彼は逃れられない。現に、六条の院の人間関係一つにしても、朱雀院や帝の意向を無視出来ないのであるから。今後女三の宮の勢威は年と共に加わるだろう。宮に悪意はないが、紫の上の正夫人としての地位が次第に影が薄くなるのは明らかである。その場合の彼女の辛勞は、彼女を愛する源氏にとつても負担となるだろう。こうして、B世界は、彼等二人の築いて来たA世界を、益益蝕んで行くであらう。その被害の皺寄せを最も蒙るのは、紫の上である。しかも、彼女は源氏を愛している限り、それに耐えなければならぬ。この不幸を断ち切るためには、三人の中の一角が、身を退く以外に方法はない。宮はその幼なさに救われて、超然としてることが出来よう。二人の中の一人——結局、紫の上が、六条の院から退くより以外に解決の道はないであらう。それなら、二人が誤解し合つてしまつて、今、紫の上が出家した方が、辛酸を回避できるだけでも仕合わせであるかも知れない。

しかし、今、もし、源氏が彼女の願いを聴き入れて、彼女が出家の志を遂げ得たところで、彼女の心に平安がとり戻せるとは限らない。彼女は発病の前、女房に物語を読ませて、夫の浮気に悩まされても終には夫が回心して末長く添いとげる、物語中の女性達の身の上を羨んでいた。彼女の本心は、源氏を離れられないのである。私を専念に求めるために出家するのだければ——男女が互に愛情を抱き合ったままで、一方が出家すれば、その出離に破綻が来るのは必定である。

要するに、源氏と紫の上とは、互に相手を理解し得ず、互に自己自身をも知らない。現状では、勿論不幸であるが、相互に愛情と理解と自覚を取り戻し得たところで、二人は、彼等を不幸にしている事態を改善することの、もはや不可能なところまで、追い込まれていたのである。

女樂で紫の上が見たものが、彼女から平安を奪ったのではなかった。女三の宮の後見達が奪い去ったのであった。言葉を換えていえば、彼女の努力を以ってしても、源氏の愛情を以ってしても、撓ね返し得ない当代官廷社会の論理が、六条院の論理を押しつけて、その小宇宙の調和と紫の上の平安とを押し崩したのであった。更に、遡って云えば、女三の宮を納れて、二人の正夫人をたてた源氏その人の無謀が、その誘因を作ったのであった。

(註)

- 1、引用本文は、石田稷二氏、清水好子氏校注「源氏物語」(「新潮日本古典集成」所収)に拠った。
- 2、筆者「若菜上における紫の上について」(檀蔭国文学第21号)
- 3、源氏が簾中を覗き見る場面も、この順序であるので、四人はこの順に着座していると解し得る。
- 4、「御遊抄」の記載例に拠る。
- 5、山田孝雄博士「源氏物語の音楽」に拠る。
- 6、葛城の歌詞は、光仁帝の即位の予言だと「統紀」にある。男を女に代えると、明石女御の立后の予祝のころを含ませることが出来る。
- 7、「齊人聞而懼。曰。孔子為政必霸。霸則吾地近焉。我之為先并矣。盍致地焉。犁錯曰。請先嘗沮之。沮之而不可則致地。庸遲乎。於是選齊國中女子好者八十人。皆衣文衣而舞康樂。文馬三十駟。遺魯君。(中略)桓子卒受齊女樂。三日不聽政。(史記・孔子世家)
- 8、紫の上は、女三の宮との初対面の場に臨む際、「われより上の人やはあるべき」と自問し自負している。(「若菜上」)
- 9、注2に同じ。

(本学名誉教授)